



福島県楡葉町

耕作放棄地を集約し、畑を“大型化” IoT導入で最先端の高効率農業を展開

株式会社福島しろはとファーム



株式会社福島しろはとファーム

カブシキガイシャフクシマシロハトファーム

- 業種 農業
- 代表者 永尾俊一氏 [代表取締役]
- 所在地 福島県双葉郡楡葉町前原浜城1 楡葉町甘藷貯蔵施設内
- TEL 0240-23-4172
- FAX 0240-23-4173
- WEB https://www.shirohato.com/FUKUSHIMA_NARAHA/
- 創業 2019年 資本金 5,100万円 従業員数 12人
- 売上高 2,800万円(2020年度)、2,200万円(2019年度)

「平成29年度農林水産祭天皇杯」を受賞した「なめがたファーマーズヴィレッジ」を設立、運営する白ハト食品工業株式会社が、同様の事業を楡葉町で展開するために設立した農業生産法人。

背景と課題

◆高品質な原料の安定的確保と多産地化

おいもスイーツの原料となる品質の高いサツマイモを安定して確保することは、事業の根幹に関わる重要事項。さらに、自然災害等のリスクを分散させる観点から、多産地化も重要な課題となっていた。

◆農家を守り、産地を育てる必要性

2000年に農業に進出して以降、農業の持続可能性を高めるためにも、若い世代の就農を促進し、農家と産地を育成していく必要があると認識していた。

◆被災地の復興と風評対策

茨城県行方市への進出を計画する中、東日本大震災被災地の復興と風評対策において、白ハト食品工業だからこそできる支援があるはずだと考えた。

白ハト食品工業の被災地での取り組みが農業と社会経済の復興の起爆剤となった

大阪府守口市の白ハト食品工業株式会社は、ナチュラル＆ヘルシーなおいもスイーツの店「らぼぽ」と、たこ焼き・明石焼きなどたこ料理の専門店「たこ家道頓堀くる」を中心に、国内外に約100店舗を展開する。代表取締役の永尾俊一氏は、「『この世女の好むもの 芝居・浄瑠璃 いも・たこ・なんきん』という江戸時代の川柳があるように、サツマイモとタコは昔から日本人に身近な食材。私たちは、その食材に芝居や浄瑠璃のような“魅せる”要素を付加し、おいしさとともに女性を笑顔にするような幸せをお届けしている」と語る。

主力事業の一つであるおいもスイーツの原料のサツマイモは、以前はほとんどが輸入だったが、中国のカントリーリスクを懸念し、2000年に農業生産法人を設立。直営農場、協働契約農場でのサツマイモ栽培を始めた。2009年、中国産サツマイモの調達が難しくなった際、競合他社が原料確保に苦しむ中、白ハト食品工業は生産を滞らせることは無くシェアを大きく伸ばす。永尾氏は、高品質な原料の安定的確保が最重要の経営課題だと改めて認識し、新しい産地の開拓、栽培面積の拡大とともに「作物と農家を守る」ことを目指した。



代表取締役の永尾氏は「消費者に安心を与えるには産地に住む女性と子どもの笑顔が大事」だと話す

2011年、国内有数のサツマイモの産地、茨城県行方市への進出を決める。9月に収穫したサツマイモから放射性物質は検出されなかったが、市場からは敬遠された。ここで永尾氏は、「消費者に安心感を持ってもらうには、産地に住む女性と子どもたちが笑顔になることが大事。その笑顔が、負のイメージを払拭してくれるはず。女性と子どもたちの笑顔を大切にしてきた私たちが、その真価を発揮するときだ」と考えた。そして、2015年秋、サツマイモ生産農場、加工工場を併設した体験型農業テーマパーク「らぼぽ なめがたファーマーズヴィレッジ」をオープンさせる。このテーマパークが人気を集め、今年年間27万人超が来場する。永尾氏の構想通り、行方に来園者・来街者の笑顔が広がった。加えて、行方産サツマイモのブランド力も向上した。単価は上昇し、生産量も東日本大震災前に比べ30%アップ。農業を継ごうと

新規事業の
開始新規のブランド
立ち上げ作業効率・
生産性向上

人材育成

事業内容の
発信・PR

Uターンする若者も増えた。行方市での挑戦は、地域の復興、社会経済の活性化の、まさに起爆剤となった。

白ハト食品工業誘致に檜葉町長が動いた 4年目にサツマイモ畑の契約面積44haへ

この行方市での事業展開に注目し誘致に動いたのが、檜葉町の町長だった。檜葉町はほぼ全域に出されていた避難指示が2015年9月に解除され、住民帰還、復興の加速が課題



2020年10月に完成した国内最大規模のサツマイモ貯蔵施設

となっていた。要請を受けた白ハト食品工業は、2017年、1.5haでサツマイモの試験栽培を実施。栽培適性、収益面での見通しが立ち、翌年からの大規模栽培開始を決めた。

檜葉町には、離農したり、帰還しない農家も多く、広大な耕作放棄地があった。その状況を、永尾氏はチャンスと捉えた。耕作放棄地を借り受け、集約し、広い畑に作り変える取り組みを、町の協力を得て推し進めた。その結果、契約面積は2018年に13ha、2021年には44haまで広がった。また、一枚一枚の畑が大きくなったことで、無人トラクター、ドローン、GPSガイダンス、IoTシステムなどが活用できるようになった。永尾氏は「福島だからできる大型農業×IoT＝最先端の高効率農業で、『きれい・気持ちいい・カッコイイの新3K農業』を発信していく」と語る。新3K農業は女性・若者も引きつけ、檜葉町・いわき市・富岡町出身者たちが新たに働き始めたという。地元へ帰還し、地元で働けることで、檜葉町でも女性・若者たちの笑顔を生み出すことができた。

2019年4月、サツマイモ栽培本格化にあわせ「株式会社福島しろはとファーム」を設立し、体制強化を図った。それに応える形で、檜葉町が建設していた貯蔵能力最大1,260tを誇る国内最大規模の甘藷貯蔵施設が、2020年10月に完成。



サツマイモ収穫には檜葉町の子どもたちも参加して笑顔を見せた

福島しろはとファームが無償で借り受け、サツマイモの通年出荷が可能になった。近い将来、白ハト食品工業が使うサツマイモの15%を、檜葉町が供給する計画になっている。

成果とポイント

◆茨城県行方市、続いて檜葉町に進出

2015年、日本有数のサツマイモの産地、茨城県行方市に「らぼぽぼ なめがたファーマーズヴィレッジ」を開業。その成功を評価した檜葉町の要請に応じ、2018年から大規模栽培を開始。多産地化を実現した。



◆「新3K農業」で女性・若者の就農促進

「日本の農業をステキにしよう!」というビジョンの下、IoT化・省力化・高効率化を図った。「きれい・気持ちいい・カッコイイの新3K農業」を展開し、檜葉町など地元出身の女性・若者の就農を促進させた。



◆産地を笑顔にして、消費者の不安を払拭

永尾氏の「産地の女性・子どもたちを笑顔にすることで、消費者の不安を払拭する」という戦略が奏功し、行方産サツマイモのブランド力は高まった。檜葉町での生産も、順調に規模を拡大している。

2030年に向けて

≫ 檜葉町でも「6次産業化+a」を展開

「らぼぽぼ なめがたファーマーズヴィレッジ」は、6次産業化を体現しているだけでなく、観光・教育・IT農業・地域貢献・子育て・交流を加えた独自の「12次産業化」を目指している。檜葉町でも、福島ならではの要素を加味したテーマパークをオープンさせ、畑発電や原発ツアー、漁業体験、フルーツビューティ、ピオホテルなど「6次産業化+a」を実現し、それらを有機的に結びつけることで、農業を軸にした、より高次元の原子力災害被災地の復興、地域社会創生の姿を描くことを目指す。



≫ 「キラキラ輝く憧れの町NARAH」へ

檜葉町周辺には、多様なリソースと「志」を持った事業者が集まっている。それらを連携すれば、福島浜通り独自のSDGsモデルを構築することができる。その中で、檜葉町も福島しろはとファームも発展を続け、誰もが住みたいと感じる「キラキラ輝く憧れの町NARAH」につなげていきたいと考えている。

